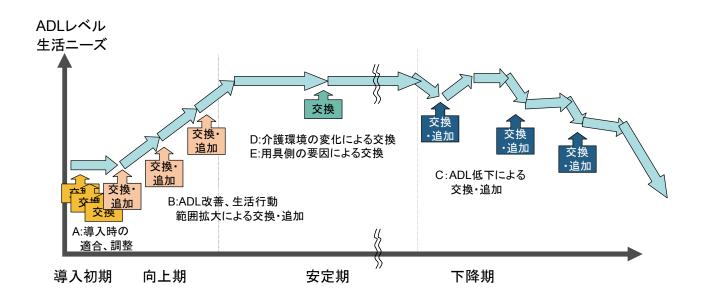
この調査では、次のような交換・追加利用パターンを設定し、このパターンに沿って、 交換利用の実態および効果を整理しています。

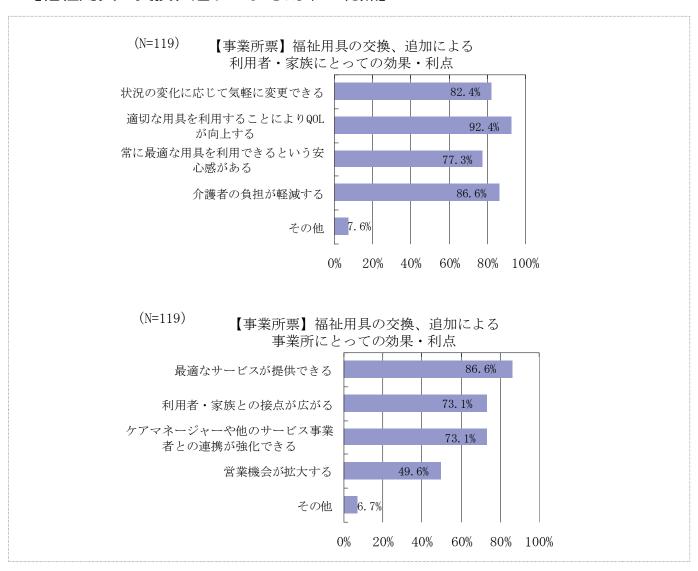


- A: 導入時の調整:導入初期に、利用者の身体状況や生活環境に適合させるための 調整を目的とした交換
- B: ADL改善・生活ニーズ拡大:用具を利用することにより、ADLの改善や生活ニーズ、行動範囲が拡大したことによる用具の交換や追加
- C: ADL悪化: ADLが悪化したり、身体機能が低下に伴う、生活の維持や安楽のための用具の追加や交換
- D: 介護環境の変化:引越しや住宅改修など生活環境の変化や、介護者の変化に伴 う用具の追加や交換
- E: 用具の要因(故障・摩耗等):部品の故障や摩耗・劣化などに伴う用具の交換
- F: その他

このような利用者の状態像の変化や、介護環境の変化、その他用具の要因等によって、 柔軟に交換、追加を行い、常に利用者の状態像や利用状況に応じて、最適な用具を利用し 続けることができるのが、福祉用具貸与のメリットであると考えられます。

ここでは、平成21年度調査において収集した119事業所からの回答について、集計、分析した 結果の中から、主なものをご紹介します。

【福祉用具の交換、追加による効果・利点】

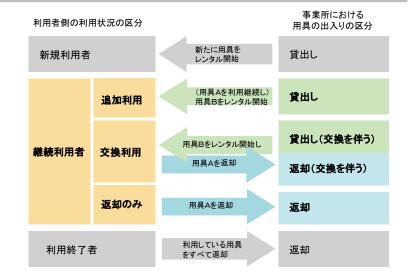


- 9割以上の事業所で、「利用者・家族にとっての福祉用具交換、追加利用の効果・利点」として、適切な用具を利用することによるQOLの向上をあげています。また、約8割の事業所は、介護者の負担軽減、気軽な変更により適切な用具の選定ができると回答しています。
- 事業所にとっての効果・利点としては、<u>最適なサービスが提供できる</u>という回答が 最も多くなっています。

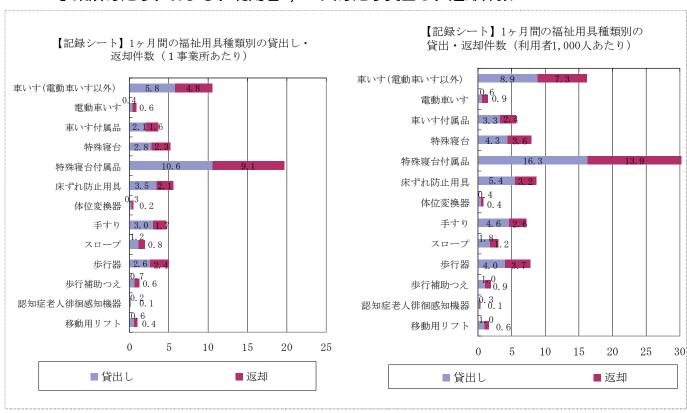
【1か月間の貸出し、返却の状況】

平成21年11月中旬~12月中旬に、事業 所で行った貸出、返却の記録を集計した ものです。

※新規利用者、利用終了者に関する貸出・返却の 件数は集計に含まれません。

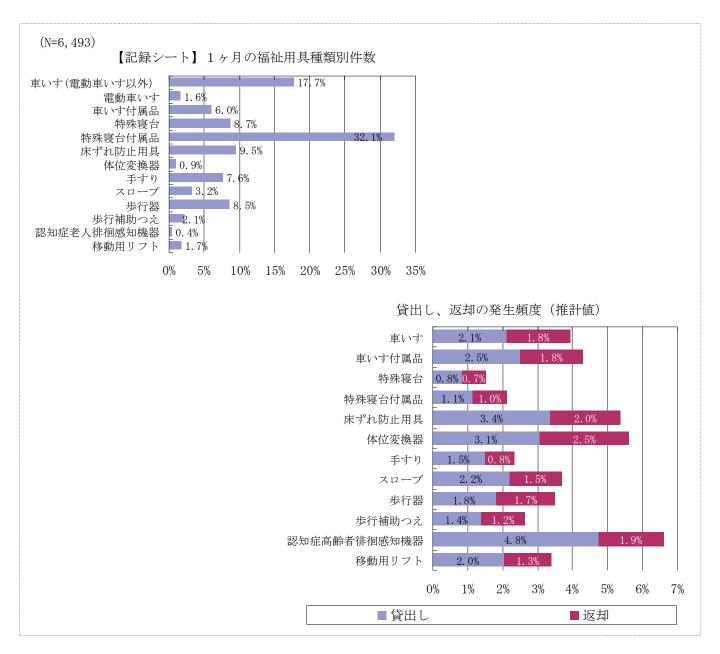


■ 1事業所あたり、および、利用者1,000人あたり貸出し、返却件数



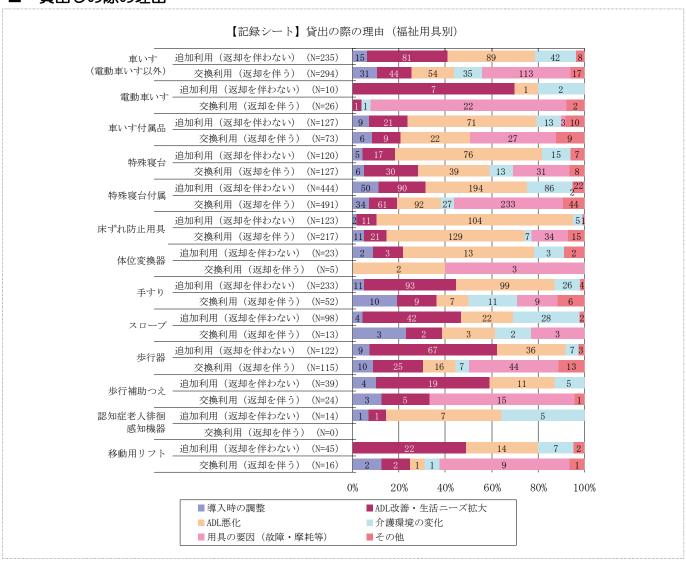
- 貸出し、返却の件数は、用具の種類によって差があります。 1 か月間に記録された1事業所あたりの貸出し・返却の合計件数は、特殊寝台付属品が19.7件、車いすが10.5件でした。
- 利用者1000人当たりに直すと、もっとも多い特殊寝台付属品で30.2件です。すべての用具の合計では92.8件であり、1か月間に利用者およそ100人に対して1件の返却や貸し出しが発生していることになります(新規利用の件数、利用終了の件数を除く)。

■ 貸出し、返却の件数と発生頻度(推計値)



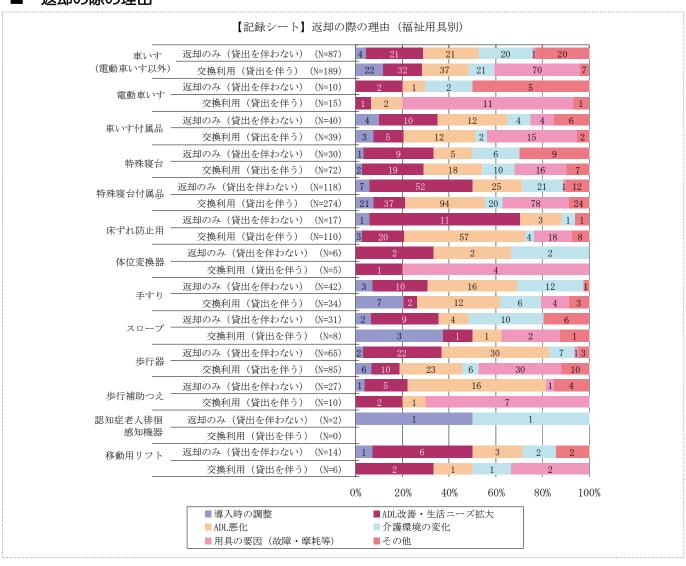
- 1か月間に記録された貸出し・返却の件数6493件のうち、「特殊寝台付属品」の比率が32.1%と最も高く、次に高いのは「車いす」の比率が17.7%でした。
- 各事業所の利用者数をもとに、介護給付費実態調査のデータにより利用者に貸し出されている用具別の件数を推計し、「(貸し出されている件数に占める)貸出し・返却の発生頻度」を算出したところ、床ずれ防止用具、体位変換器、認知症高齢者徘徊感知機器が高いという結果になりました。特殊寝台は、貸出、返却の件数は多いのですが、他の用具に比べて貸出されている件数も多いため、「貸出し・返却の発生頻度」としては、比較的低いと考えられます。

■ 貸出しの際の理由



- 追加利用の場合の貸出の際の理由は、車いす、車いす付属品、特殊寝台、特殊寝台付属品、床ずれ防止用具、体位変換器においては「ADL悪化」が最も多いという結果です。
- 一方、電動車いす、スロープ、歩行器、歩行補助つえ、移動用リフト等、移動(外出) に用いられる用具については、「ADL改善、生活ニーズ拡大」を理由として、追加利 用されているケースが多いことがわかりました。
- 交換利用の場合は、車いす、電動車いす、特殊寝台付属品、歩行器、歩行補助つえ、移動用リフトにおいては、「用具の要因(故障・磨耗等)」の比率が最も高くなりました。
- ※ 「導入時の調整」は「調整不足」を意味するものではありません。
- ※ 「用具の要因(故障・磨耗等)」には利用者の体形の変化等の利用者側の要因によるものや新製品への変更等も含まれている可能性があります。

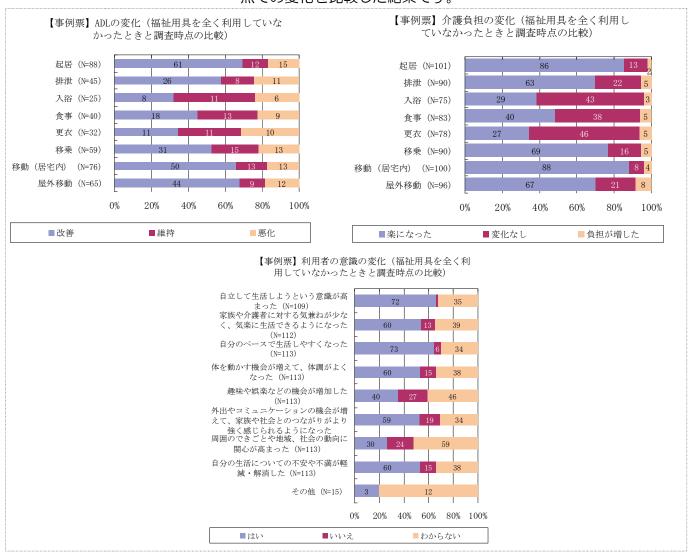
■ 返却の際の理由



- 返却のみの場合、特殊寝台付属品、床ずれ防止用具においては「ADL改善・生活ニーズ拡大」の比率が最も高く、ADL向上により用具を使わなくても起居が可能となり返却しているケースが多いことがわかります。
- これに対して、手すり、歩行器、歩行補助つえは、「ADL悪化」の比率が高く、歩行ができなくなったために用具が不要となっているケースが多いことがわかります。
- 交換利用の場合は、車いす(電動車いす以外)、電動車いすについては「用具の要因 (故障・磨耗等)」の比率が最も高いことがわかりました。
- ※ 「導入時の調整」は「調整不足」を意味するものではありません。
- ※ 「用具の要因(故障・磨耗等)」は利用者の体形の変化等の利用者側の要因によるものや新製品への変更等も含まれている可能性があります。

【事例に基づく利用効果】

提供された136事例において、福祉用具を利用する前と調査時点での変化を比較した結果です。



- ADLの変化は、起居、排泄、移乗、移動(居宅内)、屋外移動等、ほぼすべての動作 において、「改善」の比率がもっとも高いことがわかりました。
- 利用者の意識の変化については、「自立して生活しようという意識が高まった」、「家族や介護者に対する気兼ねが少なく、気楽に生活できるようになった」「自分のペースで生活しやすくなった」「体を動かす機会が増えて、体調がよくなった」、「外出やコミュニケーションの機会が増えて、家族や社会とのつながりがより強く感じられるようになった」「自分の生活についての不安や不満が軽減・解消した」の割合が5割を超えています。
- 介護負担の変化では、起居、排泄、移動(居宅内)、屋外移動については、楽になったと答えた人の割合が5割を超えています。